



- 顔料
- 着色剤
- 塗料・塗工材
- 印刷インキ・印刷機材
- 合成樹脂
- 情報記録・電子関連材料
- 天然高分子・ヘルスケア

未来をひらく色彩。

21世紀情報化社会の環境・文化形成に色彩技術を役立てます。

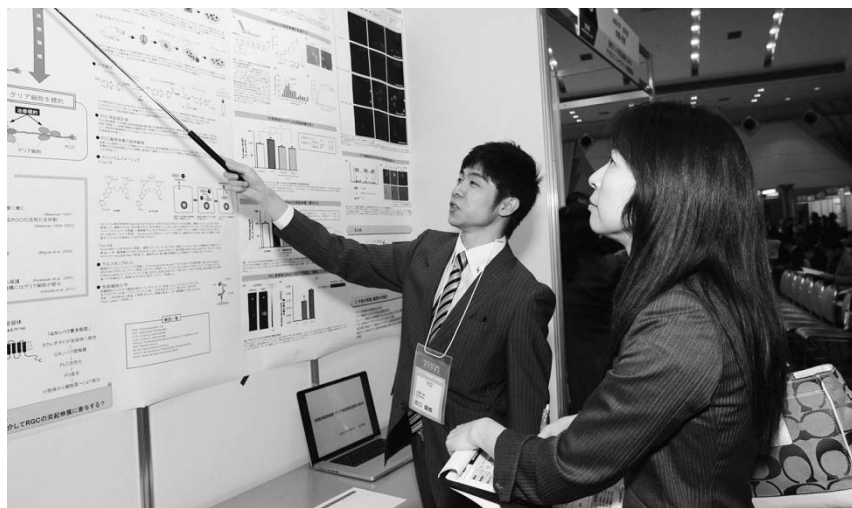
彩りと機能性で生活を豊かに

もっと自由に色を付けられたら...そんな願いのあるところに、
当社のコア技術は生かされています。
色彩技術の革新に挑戦し、新たな未来を実現します。

大日精化工業株式会社
Dainichiseika Color & Chemicals Mfg. Co., Ltd.
東京都中央区日本橋馬喰町1-7-6
Tel: 03-3662-7111 Fax: 03-3669-3924

No.583

<http://www.daicolor.co.jp>



サイエンス・インカレでは大学生が研究を発表

第3回サイエンス・インカレ

来年3月開催

大学生の自主研究 発表と交流の場に

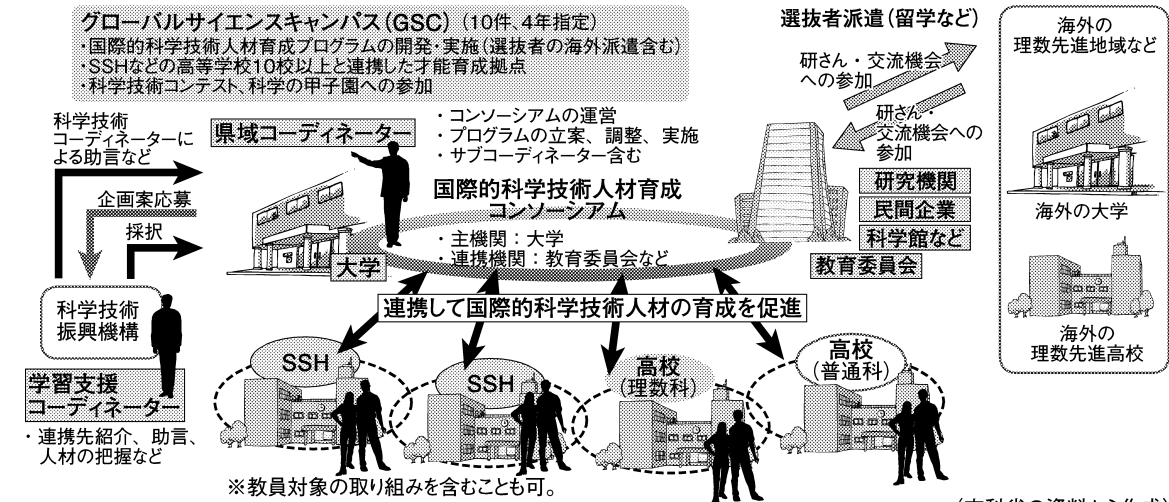
＝ 参加者募集 ＝

「サイエンス・インカレ」は学生の自主研究の祭典で文部科学省主催。今年で3回目を迎える。これまで高等学校、大学、院以降に比べ、大学の学部生の自主研究を発表する場が不足していた。そこで、全国の自然科学系（数物・化学系、工学系、生物系、情報・融合領域系）の学部生に個人またはチームで、研究内容についてプレゼンテーションを行う口頭発表部門、研究内容をまとめたポスターなどを展示し参加者・審査員に説明するポスター発表部門の2部門への参加を募集し、文部科学大臣表彰、科学技術振興機構理事長賞などを決定する。

大学の活躍する研究者

また、チームで、研究内容についてプレゼンテーションを行う口頭発表部門、研究内容をまとめたポスターなどを展示し参加者・審査員に説明するポスター発表部門の2部門への参加を募集し、文部科学大臣表彰、科学技術振興機構理事長賞などを決定する。

グローバルサイエンスキャンパスの概略



(文科省の資料から作成)

SSHに指定された横浜国立大学は、理数系分野で、最先端科学の育成に力を入れ、機器や実験室が充実し、生徒は最先端科学の研究に打ち込める。理研横浜研究所、横浜国立大学などとも連携している。松尾課長は、横浜SFHがモデル校となり、各地域で大学などと連携する高等学校が増えてほしい」と期待する。

「先進校」を指定 連携して人材育成

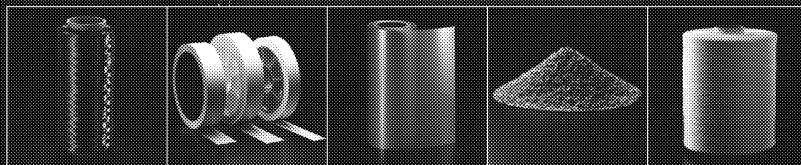
日本から7人のノーベル化学賞受賞者が輩出した化学は日本のお家芸といえる。だが、論文数や国際化学オリンピックでの成績を見ると、中国が台頭。日本が競争力を取り戻すためには、若い人材の行動力や柔軟な発想が求められる。理化学研究所(理研)の野依良治理事長は「グローバルHは先進的な理数系教育が進み地球が狭くなっ

化学好きな高校生が世界から集い、筆記・実験試験で学力を競う国際化学オリンピックの出場者は年々増加している。高い能力を持った若者を育てる上で、充実した教育環境が求められる。そこで、文部科学省と高等学校、大学、研究機関などが連携し、人材育成を支援する。

を実施する高等学校・中高一貫教育校を指定し、大学、研究機関、地域など連携して人材の育成を進める。大学から研究者や技術者を派遣し大学でいう授業を実施するなど、優れた学力を持った生徒の能力をより伸ばす試みだ。現在、全国の高等学校約5000校のうち、201校がSSHに指定されている。

素材は、 クルマの未来を変える。

わたしたちはクルマをつくる会社ではない。
わたしたちがつくるのは、素材だ。
走りや軽量化を高次元で両立させる、
カーボンファイバーボディ。
カーエレクトロニクスの高性能化に
欠かせない高機能フィルムや樹脂。
そして、環境に優しいバイオマス素材。
東レが提案する、
次世代型コンセプトEV TEEWAVE®
このクルマは、新素材という希望の集合体だ。



希望は素材に託されている。 東レ

INTERVIEW



日本化学会会長

玉尾 皓平氏

新しい研究の種 発見を 広い視野で情報集め交流

「これまで産業界が研究を独自で進めてきた部分が大きく、各社似たような研究に投資している。産業と直結する化学は重要だが、新しい原理の発見がなくてはならない。また、政府の関与は必須だ。うまく関わりを持たないと、短期プロジェクトで終わり、成果が出ないままになる」

「日本化学会が課題解決に向けてサポートできる部分は、

「国内の化学系研究者はアカデミアに約1万人、産業界に約3万5000人いる。研究者の情報を集めら

新技術を生む 産学連携

資源の少ない日本にとって化学の技術力を磨くことは経済発展の大きな支えとなる。また、人類が抱える環境、エネルギー問題を解決し、持続可能な社会を実現するためにも化学の力が頼りになる。化学技術を育てるためには企業とアカデミアの連携や、政府のバックアップが必要不可欠だ。そこで、日本化学会の玉尾皓平会長に産学連携を進める上での課題と日本化学会の役割について聞いた。

化学技術の向上において、産学官が抱える課題をいかに独創性を出して、基礎研究に取り組みか考えて

れば、広い視野から新しい研究の種を見つけ、プロジェクトを立てることが可能だ。日本化学会はアカデミアと産業界を仲立ちし、技術を発展させるための一つの場となる。人と情報がダイナミックに交わる場にするために、会員数を増やしていきたい」

「産学交流活動に取り組んでいます」

「産学連携のための仕組みづくりとして、日本化学工業協会(日化協)や新化学技術推進協会との連携を強化している。10月21日から23日まで開催した第3回CSJ化学フェスタ2013では、化学に携わるさまざまな分野の人が集って、もう一つ、シェールガスからビジネス戦略まで幅広い内容の講演を行った。日化協などの4団体と10月23日を化学の日に制定したのも産学交流活動の一つだ。また、4団体で創設した『夢・化学・21』委員会の統一ブランド化も進めたい。各地で行っているイベントにロゴマークを付けて、グッズ制作などの地道な活動も行っていく予定だ」

高等教育の環境拡充へ